

新型コロナウイルスが子ども・学校に与えた影響

— 北教組による調査の結果から

辻井 秀和

◇ はじめに

未だ収束する気配のない新型コロナウイルス感染症。子どもたち・教職員は、「学校の新しい生活様式」によって、感染予防対策をとりながら学校生活を送っています。

コロナ前とは大きく変わってしまった学校生活によって、子どもたちや学校にどのような影響が生じているのかを、北教組は二〇二〇年一二月に調査をしました。その結果をここに紹介します。

◇ 調査結果から見えてきたこと

① 学校行事への影響

調査によると新型コロナウイルスの影響により、学校の行事に大きな影響があったことがわかりました。

小学校の約八八%、中学校の約八五%で、運動会・体育大会といった行事が中止となりました。中止としないまでも、時期や開催時間、内容を変更して実施した学校も多くありました。

	当初の計画	休校後の計画
小3	1082時間	1038時間
小5	1122時間	1079時間
中1	1090時間	1070時間

(年間授業時数)

夏休み	冬休み
8. 6日	3. 8日

(夏休み・冬休みの短縮日数)

② 授業時数確保の工夫と課題

修学旅行は、日程や行先の変更となり、現場教職員はその対応に追われることとなりました。また、地域に根ざした行事を行っているところでは、その開催方法の変更が検討され、地域と一体となった行事の実施ができなくなってしまいました。

長期間の休校により、子どもたちの「学び」をどう確保していくかが重要な課題となりました。授業時数についての調査では、小学五年生ではコロナ前には年間一二二時間の授業が予定され

ていました。これは、学習指導要領が定める標準授業時数(二〇一五時間)を一〇〇時間以上上回っており、教職員の多忙の一因とされています。しかし、休校後に新たに計画されたものでは一〇七九時間と、当初予定よりは減少したものの、標準授業時数を上回るものでした。教育行政は年間授業時数を確保し、さらなる休校にも対応できるように求めました。これにより学校現場では、授業時数を確保するために、様々な対応をとることとなりました。

夏休みや冬休みは、それぞれ短縮され、授業を行う日となりました。また、一日の授業数を六時間から七時間に増やしたり、土曜授業を実施したりするなどし、授業時数を確保に奔走しました。一二月末での授業の進み具合を尋ねたところ、約七八%の学校で「例年と変わらない」としており、授業の遅れは解消されたことがわかりました。しかし、約一四%の学校では「例年よりも進んでいる」と回答しています。これは、行事の多くが中止や延期、縮小されたことも要因の一つですが、前述の授業時数確保のとりくみなどによるものと考えています。

このように、スピードを上げて授業をすることによって、本当に子どもたちの「学び」となっていたのかどうかを考える必要があります。子どもたちの「学び」とは何か。授業をやる(時数をこなす)だけの行為に意味はあるのか。ゆたかな学びを保障するために私たちは何をしなければならぬのか。大きな課題となりました。

③ 学習活動への影響と工夫

学校では、「学校の新しい生活様式」にもとづき、感染対策をとりながらの学習活動を行っています。特に、グループでの対話を伴う活動や、実験・実習などはフィジカルディスタンスの確保が難しいことから、その実施には工夫が必要となりました。

調査からは、①対話の代わりにICTを活用したり、小さいホワイトボードを活用して意見交流を行ったこと、②調理実習では、説明のみを学校で行い、調理は家庭で行うとしたこと、③合唱をすることができないので、手話の歌やボディパーカッションの指導を行うなど、制限がある中でも子どもの学びを保障するための工夫が行われていることがわかりました。現場教職員は、感染予防のとりにくみと子どものゆたかな学びを両立すべく、様々な実践が行われています。

④ 保健室の状況、子どものストレス軽減への工夫

学校での子どもの様子がよくわかる場所が保健室です。この保健室の状況がどのようになっているのかを調査結果から見えていきます。子どもたちは、今までとは大きく異なる学校生活を送っています。そうした中で大きなストレスを抱えていることは容易に想像できます。そのストレスを上手に解消できる子どももいれば、そうではない子どももいます。そういったさまざまな子どもたちに対応しなければなりません。

保健室を訪れる子どもの数は、二五％の学校が

「コロナ前と比較して増加した」と回答しています。保健室で子どもたちは、①新型コロナウイルスの感染や、学校生活の大きな変化に対する不安を訴える、②部活動などの縮小や日常生活での様々な制限による運動不足から、例年よりもケガが増加した、③保護者の仕事についての不安を相談する、といった報告がありました。また、登校をしづる子どもや不登校になった子どもが増えたとの声もあり、子どもたちが想像以上のストレスや苦悩を抱えている実態を垣間見ることができました。

子どものストレスを解消するための工夫として、①行事が中止となっても小さなイベントを積み重ねて実施していること、②何気ない会話を増やして、子どもたちの悩み・不安を話しやすい雰囲気作りをしたこと、③子どものアイデアを取り入れたレクの実施したなど、ここには書き切れないほどの工夫が報告されました。

また、保健室を利用する子どもの状況を尋ねたところ、「コロナの影響を特に感じない」と約七四％が回答しています。これは、前述の子どものストレスを解消する様々な工夫によって、ストレスが軽減された結果なのではないかと考えています。

◇ おわりに

学校は新型コロナウイルス感染症対策として、長期間の休校措置をとりました。曲折を経た後、突然の何ら法的根拠のない政治判断による休校となったことから、市町村教委・学校は朝令暮改の

指示に翻弄され、現場は混乱し、子ども・保護者に多大な負担を強い結果となりました。子どもたちは、突然友だちと会えなくなり、楽しみにしていた行事や各種大会等も中止となるなど、「学ぶこと」「人と関わること」「遊ぶこと」を著しく制限された生活を余儀なくされました。感染予防対策により活動に制約を受け、様々な行事も中止・縮小となる中で、自分たちの思いや意見を表明する機会もありませんまま、ひたすら授業が優先される毎日を送ることとなりました。

また、「グローバル人材」育成を求め「九月入学」を声高に主張する、IT環境の整備状況や地域・家庭環境等の差を考慮せず拙速にオンライン授業の推進を求めめるなど、差別・選別の教育と「教育格差」の拡大につながりかねない議論が学校現場以外から巻き起こりました。教育が政治的パフォーマンスに利用されたことは問題です。

私たちはこれからも、子どもたちの側に立った教育をすすめていかなければなりません。「学校とは何か」「教育はどうあるべきか」について改めて考え、子ども一人ひとりに「生きること」と「学ぶこと」が結びつくゆたかな学びを保障する「学校」をつくりあげていくため、子どもたちとともにとりくんでいきます。

辻井秀和（つじい ひでかず）

北海道教職員組合で教育文化部長を務める。二〇二〇年四月より現職。